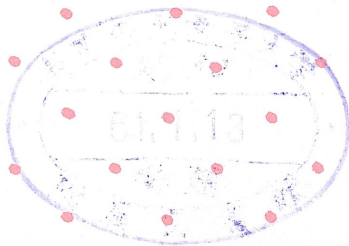


N24
1
85イ

幼児の教育 1

1986

家庭・保育所・幼稚園



第 85 巻

第 1 号

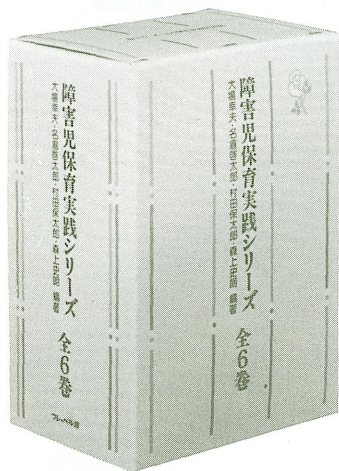
日本幼稚園協会

新刊!!

障害児保育実践シリーズ

大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗 編著

〈全6巻〉



第1巻 自閉的な子どもと保育

第2巻 発達に遅れのある子どもと保育

第3巻 ことば・聞こえ・見る
ことの障害と保育

第4巻 病虚弱・肢体不自由の
子どもと保育

第5巻 心に問題をもつ子ども
と保育

第6巻 障害児保育の基礎

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？

- ♣いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。
- ♣症状も程度も多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。
- ♣このシリーズでは、実際例をたくさん出しあって、なにをどのように指導したらよいか、具体的に考えていきます。
- ♣また、実践者との座談会を随所にとり入れ、現場のナマの声を通して保育者にとって必要な問題点を探っていきます。
- ♣たんなる理論書や研究書ではなく、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。
- ♣豊富な事例、適切な助言、イラストも多く読みやすいこのシリーズは、きっとお役に立ちます。

A5判・セットケース入り・各巻平均264頁・セット定価10,800円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十五卷 第一号

幼児の教育目次

—第八十五卷 第一号—

© 1986

日本幼稚園協会

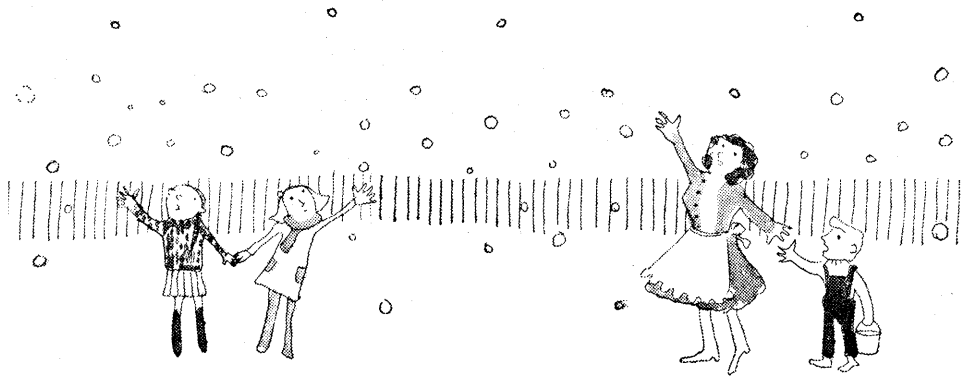
保育の実践と理論を求めて……………津守 真(4)

S F 的読み解き

第十回 子どもの古今集……………堀内 守(8)

初めての子どもたちとの出発……………松藤 章子(18)

アメリカの幼稚園に通って……………平田 純子(25)



再び、保育の中の小さなこと大切なこと(2)..... 守永 英子(32)

若いお母さんたちへ..... 入江 礼子(36)

兔園隨筆⑩ 白い文字..... 蕪木 寿江(44)

子どもたちのこと..... 大橋利恵子(48)

「非知」と「非力」に希望を見る..... M・H(51)

自己の発達と泣きべそ..... 榎沢 良彦(58)

カット・福田理恵



保育の実践と理論を求めて

津 守 真

最近入った子は、まだ母親から離れない。母親が部屋に坐っていれば、庭から室内へと歩きまわっている。私は母親の傍に腰をおろすと、母親は言う。「この子は、いつも落着きがないんです。家でも、父親が新聞をよんでいると一寸そこにいつて新聞をとり上げ、上の子が漫画をみているとそこにゆき、私が雑誌をよんでいると一寸きて、すぐいつてしまうんです。」私は話をききながら、母親はこの子の行動をこのように理解しているのかと思った。そこで母親に「このひとは、落ち着きがないんでしょうか。」と問い返した。実際、R子は、砂場にいる子どものところについて立止り、一寸見ると、水と遊んでいる子どもところに立ち寄り、それから私共のところに来て、じきに立ち去る。しかし、よく見ていると、そこにいる人に視線を少しとどめては次に移っているのである。私はその

ことを母親に告げた。この行動を「落ち着かない」と言うことは、本当はもっと違った行動であるのに、そのように理解しているに他ならない。その理解の仕方は、もう一度考え直し、その行動を通して、その子どもが何を望んでいるのかを、最初から考えてみることに、保育をするための課題であろう。

もしかすると、この子どもは、立ち寄るとの人からも、本気になって相手をしてもらえないのかもしれない。私も母親も、R子が私共のところ立ち寄ったときに、観察はしているけれども、この子の望みにこたえようとしてはいないのである。この日はこれで終ったが、その次の日から、この子どもにしっかりとこたえる者となろうと私は思った。そして、実際そのようにした。私がR子の傍を離れないことがわかると、R子は私のそばで泥をこねて水の中に入れてをしはじめた。そのときには、そこにとどまり、かなりの時間を過す。そこから、R子と私との新しい関係がはじまり、両者の間には、新たな事態の展開がつついた。

いま、その経過を述べることは差し控えるが、R子と私との間に、次第に明るく開ける関係が生じた契機は、最初に「落ち着かない」という理解の仕方をやめて、眼前に示されている現象をよく見ることによって、新たな理解の仕方をくり出すことにあった。そこで試みた理解は、事態の展開と共に、何度もつくりかえられねばならないかもしれない。そして、決して、絶対的な他者の理解などというものはなし得られないであろう。けれども、子どもが現在を意味あるものとして生きられるような、そういう理解の仕方を大人の

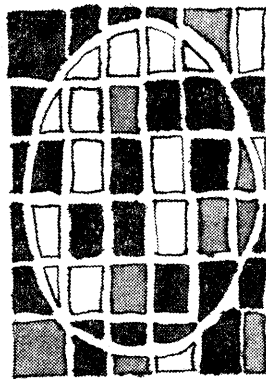
側につくり出すことができるならば、その理解の仕方は、真実により一步近づいたと考えるよいであろう。

このようなことを考えているときに、私は、カナダのエドモントンで行われた、人間科学研究会議で知り合った、ドイツのミュンヘン大学から来た中堅の教育学者、ヘルムート・ダナーの著書、「精神科学としての教育学の方法」を読んだ。その冒頭に、彼は、ドイツ語で「科学（ウィッセンシャフト）」と言うとき、明らかに異なったふたつの伝統、自然科学と、精神科学とがあることを指摘する。そして、自然科学の方法論を人間の教育に適用することをしりぞけ、精神科学の方法を選ぶ。自由な精神をもつ主体としての人間は、互いに独自で対等な主体として互いに理解し合い、共同の生活を形成すべく、共に生きている。教育の場合は、このような意味で、子どもと大人とが生きる場である。そこでは、理解ということ、どのように理解するか、大きな課題である。自然科学において、実証的、客観的方法がその方法論であるのに対して、精神科学においては、「理解」ということが、その方法論となる。この問題は簡単ではない。私共が、あることを理解したと思っ
ていても、じきにそれは一方的な思いこみに過ぎないことを発見する。「対象自体に語る
せる理解」は、一体どのようにして可能になるだろうか。

ダナーは、この書物において、解釈学と現象学と弁証法にその解答を求める。ことに前二者は重要であるという。

いま、ここにこれ以上この点に言及する暇がないのであるが、精神科学（あるいは人間科学、あるいは人間学）の方法論に、新たな眼を向けることによって、人間の教育についての学問を考えようとすることは、新鮮な世界を開いてくれる。理解は、自由な主体同士の相互的なものだから、共同の生活（歴史）を形成する途上で、互いに深め合う動的な性質のものである。

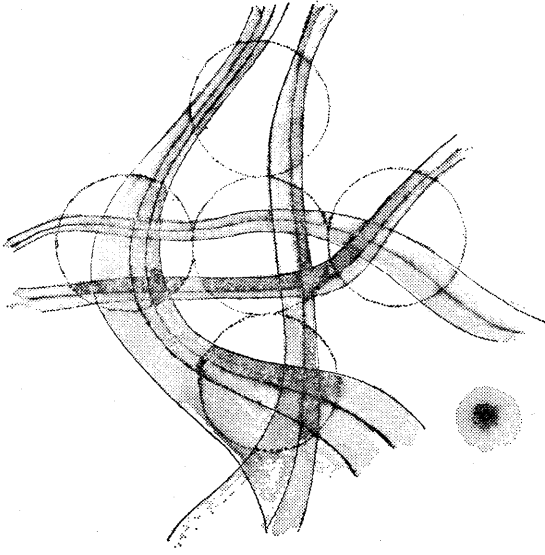
（愛育養護学校）



S F 的読み解き
子どもという風景

第十回 子どもの古今集

堀内 守



I

アルバムを眺めていた子どもが顔をあげて、母親の眼の中をじいっと見つめて言った。

「どうしてあたしの写真の数とお兄ちゃんの写真の数がこんなに違うの？ あたしのはお兄ちゃんの写真の半分もないよ。」

半分よりもっと少ない。おかしい。何かあるな。きつと。」

きめつけるような口調で言われたものだから、若い母親はたじたとした。そのため何と答えていいか、一瞬とまどいを見せた。

「だって……」

子どもはまだ眼を放さなかった。口もきつと結んだままである。この顔つきはこの子が突然大人びた問いを発するとの前ぶれである。母親はそれを予想したから、
「だって……」 だけでは切り抜けられぬことを知って嘆息をついた。

「だって、事実は、このとおりなのよ。お兄ちゃんの写真はたしかにあなたの写真よりも多い。それはたしかです。だから、事実としてそうあるということ素直に認めてちょうだい。それ以上の意味づけをすると事が面倒になるから。」

そう弁明しながら若い母親は心の中であっと声をあげていた。これではまるでこの子の次の問いを誘発するよ

うな言い方ではないか。こここのところをこう衝いてくればよいと誘っているようなものだ。

案の定、子どもは落ち着き払ってことばを切った。

「ではうかがいますがね——」

その声がまるで大人の声のように響いたので、母親は思わずあたりを見まわした。子どもの語彙が急に変わったのはその時からである。

「その事実を前にしてあとから意味づけても仕方がない。それよりも、何がこの事実を生んだのか、それを説明してほしい。結果の方よりも、動因の方をききたいのだ」

あまりむずかしいことばを使うものだから母親の方は眼をパチクリとさせた。すると、子どもは少しことばをやわらげ、ついで幼児のことばに戻った。

「ねえ、ねえ、どうしてあたしの写真の方が少ないの？なぜだか教えて。わからなかったらパパにきいてみるけど。それでもいい？」

「そうね。こういうことはきつとパパの方がうまく説明

してくれるだろうね」

とは応じたものの、母親の方もこの問いに答えるのはむずかしいと予想できた。しかし、ともかく、子どもの矛先はほかに移ったのである。母親はほっとして、読みかけていた本をひざの上にとりあげた。

ほっとする間もなかった。

子どもはまた問いかけたからである。

「食事のとき『いただきます』と言ってから食べるね。

あれはだれに向かって言うのかなあ」

母親は、本を読んでいるふりをした。子どもの言い方が半分は独言にきこえたからである。独言なら勝手に答えをさがしているに近い。それを楽しんでいるのだろうと母親は見当をつけた。

「おかしいな。いったいだれに向かって言うのかなあ」

子どもはまたそう言った。腕組みままでしているようである。そうなると、急に大人びた問いに移るはずだ。そう思ったので母親は子どもに「ケーキでも食べましょうか」と声をかけた。こうすれば、疲れないでもすむと思

ったのだ。

子どもは、「うん」とあいまいにうなずいた。「だれに言うのかな」とまだつぶやいている。

「ケーキを食べてもいいけれど、そのときでも『いただきます』と言わなくちゃ食べさせてもらえない。それはいったいだれに向かって言うのだろう。出してくれたお母さんにか。否、彼女は出してくれただけだ。製造したのではない。製造した人だって、その材料のすべてを自分でつくったわけでもない。水は、ガスは……となると、だれがつくったのかもわからない……」

母親はケーキを出しながら昔子どもだった頃、自分の祖母たちが口ぐせのように言っていたことばを思い出した。

「『いただきます』というのはな、ありゃだれに向かって言うことばなのだろう」

「そうさな。あれは、なんだ。オテントサマに向かって、お礼を言うんだろうよ」

そんな会話だった。そこに出てくる「オテントサマ」

は、ことばのひびきがやわらかかった。しかし、その意味は彼女にもまだわからなかった。物心ついてから、それが太陽のことを指しているのに気づいた。しかし、「オテントサマ」は、「太陽」のごとく科学的な文脈では使われてはいない。むしろ、神話的な、物語的な意味あい
で擬人化されていた。

これを使って答としてみようか——母親は一瞬そう考えた。しかし、昔と今とは違う。この子に「オテントサマ」と語ったところで、納得することはないかもしれない。母親はそう思い込んだ。

「昔と今とは違う」。この言い方でいろいろな事態を切り抜けてきたつもりであった。

ふと、「違い」ばかりが強調されてきたように思えた。似たところ、共通するところもあるはずではないか。こういう疑問が湧きあがってきた。

子どもの方はそのとき本当にヒトリゴトを言っていた。

「どうしてあたしの写真がお兄ちゃんの写真よりも少な

いのかな。『いただきます』というのはだれに向かって言うのかな。だれか知ってるかな。」

まるでうたっているようにきこえた。

母親は急におだやかな顔つきになった。そしてこう言った。

「あたしの写真の方がお兄ちゃんのよりも少ないのはね。パパもママも初めて赤ちゃんをもったので珍らしかつたからよ。珍らしかつたし、また不安だった。だから、その時ごとに、『やっと、ここまで大きくなってくれたか』という思いをこめて写真に写したの。それに対し、あなたのおときはね。もう、どのようにして大きくなっていくか、パパもママもお兄ちゃんを育てたからわかっていた。だから自信をもって育てたの。写真が少ないのはそういう自信のあらわれなのよ」

母親はまるで自分の声のようでない自分の声に驚いていた。ことばが勝手に口をついてとび出してくるようであった。子どもの方も母親がいつもより長く、かつすらすらとしゃべっているのに驚いていた。そして納得し

た。

「そうだったのか」と思った。すると、急に気分がすうと軽くなり、浮き浮きしてくるのだった。

「ママ、わかったよ。そちらの方はよくわかったよ。まるで、真綿のふとんの上にふわふわと浮かんでいるような気がするよ。ふとんのような答えだね」

II

子どもは当分の間「いただきます」に関する疑問を忘れていた。ということとは、食事のときには気易く「いただきます」と言ってから箸をとっていたことを示している。それが五日ほど続いた。母親の方もその間いこのことを忘れた。忙しかった。次から次へとやるべきことが押し寄せてきた。

洗濯物がふえた。夫の出張が重なった。自分の母親がその間にやってきた。親子水入らずというよりも、家中が急に不安定に見えるようになった。老母はやたらに

家の中を片づけ始めた。黙々と掃除をやり、黙々と片づけた。最初のうち、よくやってくれると思っていた若い母親も、二日もすると老母の気づかいがわずらわしくなってきた。子どもは老母になつき、甘えをおぼえた。甘たれている間は、あのようなむずかしい問いは生じないだろう。もうしばらくは大丈夫だと若い母親は安心していた。

朝食のときだった。

子どもは黙って食べはじめた。

「おや、『いただきます』はどうしたの」

そう老母がたしなめた。子どもは老母を見あげ、「あ、いけねえ」というように首をすくめ、『いただきます』と言いき直した。

「いつもそう言うてから食べるものだよ」と老母がやさしく言った。

「いつもそうしているよ」

と子どもが応じた。

若い母親がことばをついだ。

「いつもそうやっているよね」

食事が終わった。子どもは自分の食器を台所の洗い場まで運んでいき、「ごちそうさまでした」とくり返した。

老母は「ごちそうさま」と応じた。

子どもがすかさずたずねる。

「ねえ、おばあちゃん。『ごちそうさま』ってどんな人

？」

「『ごちそうさま』か——」

それはね、きつとにこにこした人だと思うな」

「おばあちゃん、見たことある？」

「あるよ。あるとも。毎日出あっているさ。こうして、

まいにち三度三度のものをいただいていられる。おかげ

で食べるのがおいしい。ありがたいことだと思ってるね。

いつも『ありがとうさん』というつもりで感謝しているの

ね」

「『ありがとうさん』はどんな人？」

「そうさ。にこにこしているな。怒った人からは逃げ

ていく。感謝している人のまわりにはいつもいる。」

「ふーむ。わたしには見えないがなあ。」

「なに。見えるものがすべてじゃない。見えぬものもなにかも大事なものがたくさんあってな。」

いつもなら何とか理屈をこねる子どもがこの日ばかりは感心してうなずいている。おかしなこともあるものだと若い母親は安心していた。会話は続いている。

「見えぬものなかにありがたいものがあると昔から言うよ」

「ふーん。昔からね」

子どもの心には「昔」がずっしりと重いものと思われる

た。「昔」と「今」しかない。「昔」は「今」よりもずっ

と重く、自分の力ではそうたやすく修正することもでき

ない。その「昔から」そうときままっているのだとしたら

文句を言えたものじゃない。

若い母親はこの会話のなかに割り込んだ。

「『いただきます』って言うのも、昔からそう言うよう

にきまっているのよ」

すると子どもはげげんそうにふり向いた。

「おかしいな。昔なら何にでも『さま』をつけたり、『さん』をつけたりするのでしょう。それなのに『いただきさま』とはだれも言わないね。」

これはきつと、昔の言い方じゃなくて、今の言い方だよ。」

老母がこれを引きとった。

「うん、うん、なかなかかしこいところがある。面白いところに眼をつけた。昔は『さま』が多いとはたしかにそうだ。」

老母がしきりに感心するので、子どもは少しテレクきそうに頭をかいた。

老母は老眼鏡をかけた。そして目をつぶった。子どもは驚いた。眼鏡をかけて目をつぶるなんて、どこか変だと思ったからである。

「すぐに答えが見つからないときは、こうやって目をつぶって考えるのさ。そうすると答えが向うから走り寄ってくる」

子どももマネをして目をつぶった。

目の前に赤い光がちらちらしているようだった。考えるということは大変なことのようなのである。

あくびが出た。

「何かいい考えがまとまったかい」

老母がこう問いかけた。子どもは「ううん、何も」と答えた。

「無理しないでおけ。考えがまとまらんときは、そのままいなさい。波に浮かんでいるように、五体の力を抜いて。力まないで波のまにまにただようのさ」

子どもはますますわからなくなった。が、雰囲気は伝わってきた。何となくわかる。ただうまく表現することはむずかしい。しかし捨てがたいのだ。

III

夕食の時だった。

子どもはおばあちゃんの口の動かし方をじっと見ていた。もぐもぐと口を動かしているおばあちゃんは小さく

見えた。昼間見たときよりも小ぢんまりとして見えた。

こんな小さなおばあちゃんからママのような大きな人が生まれたのか。子どもはそう思って母親の方も見た。

「きよろきよろしないで食べることに」

母親はそう注意した。

「お前は少しきびし過ぎるよ。そういういちやいのやいのと言うもんじゃないよ」

と老母が言う。

ひとしきり、皆黙っていた。電話のベルが鳴った。母親が出た。

「パパからかな」と子どもがつぶやいた。

「そうだろうな」と老母が応じた。

若い母親は機嫌よく戻ってきた。

「明日帰るんですって」

「そうかね。それじゃ、あたしもそろそろおいとましようかな。」

「行きちがいになっては困りますよ。一晩ぐらいいいしよに話していって下さいいな」

「うん。でもね……」

子どもの方はそういう会話を物ともせず、壁のテレビを眺めていた。クイズがはじまっていた。そちらに夢中になっていたので、二人の会話が耳に入らなくなった。

「何だな。この子のお兄ちゃんが死んでからもう三年になるね。すると、この子はもうあの時のお兄ちゃんのトシになったわけか。よく似ているから、まるで生きかえってきたみたようだね。」

「きょうもまた、こっそりとお兄ちゃんの写真を出して眺めているんですよ」

「ふーん。そんなになつかしがつているのかね」

「いいえ、そうじゃなさそうだね。お兄ちゃんの写真の数を数え、自分の写真とくらべてるんですよ。そのあとで、『どうしてお兄ちゃんの方がこんなに枚数が多いのか』と訊くのですよ」

「へえ。そんなに数えられるのかねえ。ざっと見ても何百枚というくらいの差がありそうなのに、こんなトシで数えあげられたのかしら」

「ちょっと変ね。変だといえ、時折大変むずかしい質問もしかけるの。あたしなんかたじとになってしまいそんな質問で、ハラハラさせられることもあります」

「かしこくなつた証拠じゃないの。いいことだよ。知恵がついているのだよ。きつと。」

「お母さんは何でも好意的に解釈なさるからそんなことが言えるのよ。わたしの立場にもなつてみてくださいいな。『いただきます』とはだれに向かって言うのか、なんてたずねられたつて、どう答えていいやらわかりませぬよ。昔のように、『そりゃ、オテントサマにするのさ』と答えても今の子どもは納得しないでしょからねえ」

「そんなことはないよ。子どもは昔であれ、今であれ、同じような答えて満足する。なんならやってみようか」

こうして、子どもはテレビからひき離されたのである。わけもわからぬうちに、説明がはじまった。

「あのね。いいかい。食事をいただくときにはね。『いただきます』と言うのだろ。あれはオテントサマに向かって感謝するつもりで言うのだよ」

子どもはげんそうな顔を向けた。おばあちゃんが突然変な説明をはじめたからである。なぜこんな説明をはじめたのか、子どもは筋がのみこめなかった。それで口をきつと結んだ。

いつものように、それとともにむずかしいことが子どもの口をついて出てきた。

「オテントサマか。森羅万象。万有。宇宙論」

お母は驚いた。その声は子どものようでなかったからである。まだ変声期には早いはずだが。そう思った。思わずテレビの方へ身を乗り出したくらいである。それは、たったいま耳にした声が、この子の口をついて出てきたのではなく、まるでテレビのアナウンサーでも何か言っていたかのように響いたからである。

「ね、わかったでしょ」

「驚いたね。でもなかなかむずかしいことを言うものだね。シンラバンショウなんて、久しぶりで耳にしたことばだよ」

こんなことが二人のあいだで交わされた。

「何かケジメをつけるのには、かならず何らかの儀式が必要なのだよ。『いただきます』だって、儀式なのさ。自分を超えた何か、家族や仲間を超えた何かに対して訴えたり、告解したりする。それでケジメができる。」

「ケジメね。」

「おかしなことに、ケジメは儀式と切れて独り歩きをすることもある。『いただきます』もそれと同じ動きをはじめたのかもしれないな」

「その虚を衝いてくるのかな、この子は」

子どもはこんな声が耳に入らなかった。彼はいつの間にかすやすやと眠っていた。

「あれ、あれ、こんなところで眠ってしまった。放っておいたら風邪をひくよ」

「まあ、ま、『おやすみなさい』とも言わないで眠ってしまったりして。けれど、いったい『おやすみなさい』とはだれに向かって言うのでしょうか。この子の言い分では『おやすみさま』となる方が古風にひびきます」

若い母親は朗らかになって、そう冗談を言った。古い

た母の方はそれをまじめに受けとめ、考えはじめた。老眼鏡をかけて、目をつぶって。

しかし、しばらくすると、老母もこくりこくりと船を漕ぎはじめた。

(名古屋大学)

初めての子どもたちの出発

松 藤 章 子

この四月から四歳児三十三人を担任し、一学期の三ヶ月間を夢中で過ごしてきた。子どもたちと共に生活することを通して人生を二度楽しめたいなあ。もう過ぎ去った、或いは知っていると思いついて、世界を再発見していきたくないなあ。……と、そんな期待を胸に、人生のスタートを生きている子どもたちに、幼稚園ってわくわくするくらい楽しかったと暖かく心に残るような一時期を、過ごさせてあげたい。……などという夢を描きながら、私の幼稚園生活は始まったのである。残念ながら現実には、発見や感動の心をどこかに置き忘れていたと思えるほど、とても余裕のない三ヶ月であったのだが、小さい子どもたちが、もうそれぞれの問題にぶつかりながら精一杯生きているということに、驚かされ、悩みもし、そして保育という仕事の難しさ、奥深さを予感した三ヶ月であった。今、一学期の保育記録を読み返しながら、気になっている子ども一人であるI男の変化と彼のぶつかっている問題について、考えてみようと思う。

。四月十七日（水）

気持ちの良い朝だった。子どもたちもすぐ外に飛び出して行った。その中で、I男がむずかしい顔をして、部屋の中で本を読んでいる。

幼稚園が始まって間もない、雨の翌日の気持ちの良い朝、子どもたちは挨拶をするとすぐに外に飛び出して行き、室内ががらんとしている日があった。何人かは部屋に残っていたのだが、なかでも、自分の中に閉じ込もっているように本を読んでいるI男の姿が、私は気になった。I男はこの四月に他の幼稚園から入園してきた子である。いつも保育後に何も思い出せないほど、ほとんど印象がなかったのだが、この日、いつもは私に向かって来ていた子どもたちがいなくなった時に初めて、対照的な彼の姿が飛び込んできたのである。同じ日、トイレの場所をもう一度教える為にI男と手をつなぐうとした時、彼は手を引っ込めた。その動作から私は、入園式の日心に引かかった一人の男の子を思い出した。椅子に腰かけてもらおうとして、子どもたちの後ろから「さあさあ」と肩に触った時、一人だけびっくりしたように振り払った子がいた。無意識にこういうしぐさをした男の子……あっ、あれがI男だったと突然思い出したのである。そして私は、まだ何であるかはわからないが、彼が今、何か問題を抱えていそうだということを、遅ればせながら感じたのである。

。四月十八日（木）

I男がダイナミックに絵を描いた。かなりの時間、夢中で描いていた。私に大きな画用紙を求めて、マジックを使っているか尋ねて、絵を描く場所をさがして、腰かけて集中していた。

この日、I男の描いた怪物か何かの絵が、線の力強い素晴らしい絵だったので、私はおとなしそうにみえる彼の持っているエネルギーに気づき、驚いた。そして、彼が幼稚園で遊ぶことを拒否しているかのように思っていた私は、長い時間集中して取り組んでいる彼の姿に安堵し、私に初めてしっかりと話しかけてきたことが大変嬉しかった。その翌日も翌々日も、さらに何枚も絵を描いて帰ったので、一人でかなり充実した時を過ごしていたのだと思う。だが、何よりも絵が描きたくて画用紙に向かっていたというよりは、三々五々遊び始めた子どもたちの中で、自分だけが入りそびれているように感じながら、彼は画用紙とマジックを手を取ったのではないかと、私には思われた。一人残ってしまった―自ら残っているように見える―時は、困惑した表情でウロウロしているI男の姿を、このころからよく見かけた。また、同じ組の子たちの中で、楽しそうに駆け回っている姿も時々目にした。だが、彼の遊び方をよく見もせず、彼の楽しそうな表情だけで安心してしまっていた自分を、今思うと反省する。なぜなら、混ざって楽しそうな表情をしていたというだけでは、友達と交流しながら楽しく遊んでいたかどうかはわからないのである。ただ、友達の方に気持ちがかかっているということだけは、確かめられる。

。五月二十一日（火）

I男が髪を短く切って登園。S男が目ざとく「おじいさんみたい」と言う。すぐに「涼しそうで、それに似合っていて先生好きよ。」と言ってみたが、近くにいた男の子たちはS男の表現に触発されて、からかい始める。H男は、笑いながら体ごと押していく。I男は表情が固くなってきて、自分の頬や手をつかんだり、手を出すまいとこらえているかのように両腕を体の前で交差させながら、H男を押し返していた。無理に引き離れたが、I男の息づかいがとても荒かった。I男は、一言も話さない。（……S男が泣きながら訴えに来てわかったのだが、I男はあとでS男をつねったらしい。私はI男には何も言えず、S男と二人でI男の気持ちについて話してみた。そのあとS男は、I男とごめんねの握手をして、遊びに誘ってあげていた。）

午後、I男はお遊戯室から一人戻って来ると、「こともがないていたよ」と、同じ組の子のことを私に教えに来てくれた。

他者に向かって、言葉で自分の気持ちを伝えることができないI男、そしてとても固くなってしまふ彼と共にいて、私も胸が苦しくなった。そう言えば、I男が他の子に「いいよ。」と答える以外のはなしをしているところをまだ見た覚えがなかった。他者に話しかけることができないということ、を、一体どのように考えていったらよいのだろうか。言葉でうまく表現することができないという以前に、声そのものを出せなくなってしまうという問題に、彼はぶつかっているように思われた。一般に、緊張すると声は出てこないものだが、そうだとすれば、I男は何に対してそれほど緊張してしま

うのだろうか。

しかしこの日の午後、「こどもがいないんだよ」と私のところにI男が教えに来てくれた時、私は彼の心がゆっくりと、お友達にも私にも開いてきていることを確信することができて、光が差したように嬉しく思った。

。六月十二日（水）

（……忙しく動き回っていて、K男の製作をなかなか手伝ってあげられなかった時のこと）I男が「せんせい、Kくんがよんでいるよ。」「そんなのあとにして、Kくんがせんせいをよんでいるよ」と、何度も私に言いに来る。K男の「手伝って欲しい」という待ちくたびれた気持ちを代弁して、自分は見ているだけなのにおもしろいと思った。今日はI男は一日何もしなかった。K男の製作のそばで、何やら作っているようで作っていなくて、フラフラしていた。

彼はK男の製作を見ているだけで、二人の間には目に見える交流はなかった。それなのに、K男を放っておけないでいるI男の行動から、I男には友達の気持ちを察する力が十分あって、友達を何とかしてあげたいと思う心も育っていることを、あらためて確認することができた。そして、自分から踏み出せるまでにはまだ時間がかかるかもしれないが、彼にはきつといつか友達ができるだろう、そして、その為の援助をしてあげるのが保育者としての私の役割であると改めて思うのである。

。六月二十日（木）

I男が「M君は？」と私によく聞きに来る。I男はM男を頼りにして、M男といると安心して
いるように見える。工作をしている最中、M男がやって来て、I男を遊戯室へ誘い、「先に行つて
待っているね。」と言つて出ていく。I男はしばらく作り続けて完成させたあと、どこに置いたら
よいかを私に尋ねてから、急いで飛び出して行く。私は心から行つてらっしゃいと声をかけた。少
ししてどうしているかと思ひ、遊戯室をのぞくと、組の男の子十人近くが駆け回っている。I男も
いる。このころ男の子の間に、突然逃げて仲間はずれにするという殺伐とした遊び方がはやって
いたので、私はこの時、友達同士の楽しい遊び方と思ひ、色鬼を始めてみた。I男は初めてみるよ
うな生き生きした表情で、M男の近くを駆け回っていた。I男が鬼になって皆に色を知らせる時、
私は手をつなぎながら励ましてみたけれども、I男は固くなって息づかいが荒くなり、とうとう声
が出せなかった。私が、彼から聞き出した色を皆に向かって代弁して、色鬼は再開する。I男はま
た生き生きした表情に戻つて、エネルギーに追いかけ始めた。

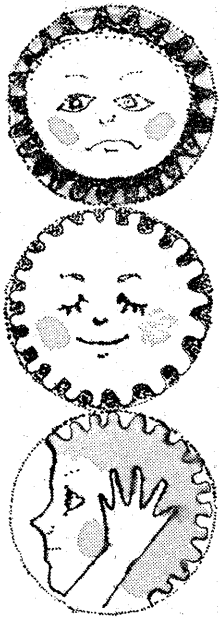
生き生きした表情のI男を見る時が多くなり、夏休みになつてしまふのが残念な学期末であつた
が、彼が友達に向かつて話す姿をとうとう見られないまま、長い休みに入った。そして、二学期の始
業式で久しぶりに顔を合わせた時、I男は再び固い表情をしていた。

新学期三日目、S男とM男が楽しそうに追いかけっこをしながら部屋に入つて来た時、それを見て
いたI男も、追いかけっこの中に入り始めた。一見すると一緒に遊んでいるように、楽しそうな表情

で近寄ったりあわてて離れたりしていたのだが、S男とM男が遊びの輪の中に彼を入れていないことが見えてきた時、私は胸が痛んだ。少しして、I男は一人で離れてしまった。他児から仲間として認めてもらっていなかった彼に、どうして学期の間気づけなかったのだろう。一緒に動き回っている時の楽しそうなI男の表情を思い出すと、いっそう胸が痛む。そして、自分の気持ちを声に出して伝えることのできない彼がぶつかっている問題を、記録を読み返しつづつ考えながら、今新たに、二学期を出発したところである。

I男に限らず、一人一人の子どもがぶつかっている問題をしっかりと捉えて、保育者として意識的、積極的にかかわっていかねばいけないと思いつつながら、振り返ってみると全く未熟な自分を痛感する。しかし、どうしたらいいのか子どもと一緒にわからなくなりながら、日々一人一人とかかわることのできる短い時間を、とにかく精一杯生かしてみようと思っているところである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



「アメリカの幼稚園に通って」

平 田 純 子



長男圭佑は父親の留学に伴い、四歳二ヶ月の時から一年四ヶ月程、アメリカで生活する機会を得ました。滞在先は、イリノイ州のノースブルックというシカゴの北にある郊外の緑の美しい町でした。

日本を発つ時、お茶の水女子大学附属幼稚園の三年保育の年少組に在園しており、幼稚園の生活にも慣れ、お友だちと楽しく遊べるようになったところでした。せっかく慣れた幼稚園を離れて、ことばのわからない国へ行き、新しい環境にうまく適応できるかしら、病気は大丈夫かしら、と親としてはいろいろ不安がありました。が、半年前にアメリカに渡っている父

親が現地で準備をすすめてくれていましたので、私と子ども二人（四歳の長男と二歳の長女）は期待と不安を胸に日本を発ちました。

着いた早々、記録的な寒波の襲来に遭い、日本では想像できない厳しい寒さにびっくりし、心細い思いをしました。少しの間も外に立っていることはできず、雪は降りつもっています。子どもたちにとっては雪遊びどころではありません。家の中にじっとしている以外できませんので、早速幼稚園を探すことにしました。前もって父親が近くの日本人の方に聞いて調べてありましたので、その中からいくつか問い合わせることにしました。まず、地域の公立の幼稚園はすでに定員いっぱい、順番待ちというのでだめでした。次にその地域で知名度の高いモンテッソーリ・メソッドを取り入れている幼稚園に聞いたところ「うちではある期間にわたって在園して効果の出る教育を行なっているので、二年以上通園できないならば受け入れることはできない」と断わられました。そこで同じモンテッソーリ系で少し離れた

ところにある幼稚園と、近くの日本の男の子の通っている小さな幼稚園を訪ねてみることにしました。二つとも園長先生と直接お会いしていろいろとお話を聞き、園内を見学させていただいた結果、家庭的で親しみやすい雰囲気と、無理のないスケジュールになっているという点で、ラ・プライ・エコールという家から車で五分程のところにある小さな幼稚園に入れていただくことにしました。

アメリカでは、親の事情によって選択ができるよう、いろいろなタイプの幼稚園があります。通園日数も母親の都合で週三日、又は四日だけ通うケースも多く、日本のようにある年齢になったら毎日通わせるとは限らず、義務教育までの保育の形はさまざまです。入園に際しても、試験はなく、園の責任者と直接面談して決めるケースがほとんどで、外国人の子どもに対する受け入れも全く区別がないようでした。

アメリカでは地域により教育のレベルにかなりの差があるようで、父親が大学のあるエバンストンという町の

中ではなく、少し離れた郊外に住居を決めたのは、子ども
の教育に良い環境を選んだためでした。ノースブルッ
クという町は、人種的に黒人が少なく、治安もかなり良
く、町の財政も豊かで教育に力を注いでいるので教育レ
ベルが高い地域とされており、日本の駐在員の家族も多
く住んでいました。アメリカでの子どもの教育を考える
場合こうした配慮も大切なことと感じました。

圭佑は新しい幼稚園の生活を始めましたが、途中から
入園する子どもも多く、他に東洋人もいたので、特別な目で
見られることはなく、スムーズに仲間に入れてもらった
ようです。日本で幼稚園の生活を経験しているのです、こ
とばがわからなくても皆と一緒に行動することができ、
最初から特に困ることはなかったようでホッとしまし
た。またはじめに入ったクラスには、既に六ヶ月通園し
ている日本人の男の子がいて、一緒に遊べたことも心強
かったことと思います。

外国で暮すには、その国で使われていることばを理解
できることが大切ですから、なるべくはやくことばに慣

れる環境づくりを考えました。まず、幼稚園で困らない
ように挨拶と「お手洗に行っていていいですか」という英語
を教えました。圭佑は恥ずかしがり屋で、思っているこ
とをすぐに言えないところがあり、朝の挨拶も親の方か
ら促して、やっと言うという感じでした。しかし先生方
も決して無理強いはなさらず、「朝なのでウォーミング
アップに時間がかかるのでしょう」と助け舟を出して下
さいました。また朝お会いすると「ステキな色のシャツ
ね」とか「週末は楽しかったの？」など必ず声をかけて
下さいます。圭佑も最初はかなり緊張していましたが、
次第に慣れて笑顔が出るようになりました。

家庭でもなるべく英語を使うように、このことでした
が、親子だと照れてしまうのか積極的には話したがりがま
せん。でも毎日の幼稚園での生活やテレビなど、次々に
耳から入ってくることを覚えて自分なりに理解してい
ったようです。四歳を過ぎてみると、日本語もしっかり
話せるようになっていきますので、「この英語は日本語で
こういう意味のことだ。」と自分で判断しながら覚えて

いったと思います。はじめは単語だけでしたが、少しずつ文章も覚えて、入って半年程たった頃、「今日、圭佑はセンテンスをししゃべりましたよ」と先生がうれしそうに報告して下さいました。ことばに慣れるにしたがって、お友だちとも積極的に遊べるようになり、仲の良いお友だちもできてきました。

また、読み書きも日本にいる間にアルファベットを覚えていたので、抵抗なく自分の名前を書いたり、単語を見て発音できるようにしました。

しかし、本来、こどもの世界は人種やことばが違っていても、遊びという共通の世界をもっていて、一緒になることができます。特に男の子にとってテレビ漫画のヒーローやロボットのおもちゃなど関心をもつところは同じで、圭佑もアメリカのテレビ漫画にすっかり夢中になり、毎日のように見ていました。おもちゃのコマーシャルもすっかり記憶して、おもちゃ屋さんに行きますと「ボク、これ知ってるよ、テレビで見たから」と、その動かし方までいろいろ知っているのでびっくりさせられ

ました。テレビの子どもに与える影響力は日本もアメリカも同じように大きく、親の毅然とした態度が必要なのは共通です。

幼稚園での毎日の教育は、あらかじめスケジュールがたてられているようで、お部屋の中での活動が主でした。皆で工作をしたり、先生に本を読んでいただいたり、ゲームをしたり、又各自が自由に遊ぶ時間もありました。お天気の良い日は皆で外に出て遊びますが、寒さや強風のため、日本のようにいつでも外遊びができるわけではないので、思いきり駆けまわる時間が少なくかわいそうでした。

この幼稚園には、同じ建物内にプレーセンターといって保育時間以外に子どもたちを預かる施設があります。ここでは幼稚園の後、お弁当を食べて遊ぶことができます。圭佑も半日の保育時間ではもの足りず、また日本の幼稚園の保育時間に合わせるつもりで、週三回お弁当持参でここへ通っております。特に決ったスケジュールはたてられていないので、子どもたちは各自好きに

ゲームやぬり絵、ブロック遊びなどをしていました。このセンターの先生が圭佑をとて可愛がって下さり、圭佑も先生になつてここへ行く日を楽しみにしていました。幼稚園の時間とは違って、小人数の中でリラクセスした気分で遊ぶ、自然に英語と接するのでその意味でも効果的だったと思います。最後の頃には、「圭佑は最初はとても緊張しておとなしかったけれども、この頃は私をからかったり、ふざけたりして、すっかり活発に変わってびっくりしているんですよ。」と言われ、一年近くの間ですっかりアメリカの生活に溶け込んでいるのがわかりました。

アメリカで生活し、アメリカの幼稚園に通わせて、日本との違いをいくつか感じましたが、まず、アメリカでは「こうしなければいけない」という規則は最低限にして、あとは個人の自由に任せていることが多い、ということ。別の観点から言うと、日本では、社会性は厳格なルールに従い、協調性を養うことに重点が置かれてくるように思えますが、アメリカでは人に迷惑をかけな

い最低限のルールを身につけていれば、あとは他人とのコミュニケーションの能力を身につけることに重点が置かれてるように思います。

アメリカの子どもたちはどこでも座り込み、好きな格好で遊んでおり、日本人から見れば決してお行儀がよいとは言えません。またおもちゃや本を家から幼稚園に持っていくことも自由ですし、着るものも季節にこだわりません。母親も、朝子どもを送る際、教室まで入る人もいますし、車寄せで子どもを降ろして一人で行かせる人もいます。

おやつや食事の前に手を洗う習慣はありません。日本では必ず手を洗うよう小さい時からしつけますが、アメリカではあまり気にしない親が多いようです。このように、日本の方が決められた規則を守ったり、グループ活動を通して人との協調性の大切さを小さいうちから学んでいっているように思います。

一方、アメリカでは自分の意思をはっきりことばで相手に伝えることが何より必要ですから、小さい時から

のおじせすに人に接して、意思表示できる訓練が家庭内でも、幼稚園でもなされているのを感じました。日本のようにことばに出さなくても何となくわかってもらえるときか、以心伝心ということは通用しません。

またアメリカは画一性よりも個性を重んじる国ですから、子どもに教える際も、皆で一緒にとりより、各子どものレベルや個性に合わせて個々にその子の興味をひき出すように行なっています。また良い面を大いにほめて、子どもにやる気を起こさせ得意な面をどんどん伸ばすというやり方に徹しているように思われました。

圭佑のアメリカでの生活は一年余で長い期間ではありませんでしたが、その間に幼稚園を嫌がったり、日本に帰りたいと言いつたりすることは一度もなく、家中で一番アメリカ生活を楽しんでいたように思います。日本とアメリカの様々な習慣やことばの違いも自然に受け止めて、親が困ったり、悩んだりすることは何もありませんでした。もう少し年齢が大きければ、学校生活でことばのハンディを感じたり、生活面の違いも拒否反応をも



ったり、ストレスを起こしたりするかもしれませんが、年齢的にまだ小さく、親や先生の言うことを素直に受け入れてくれたので、そういった問題は生ぜずに済みました。

帰国してすぐ、日本の幼稚園に戻り、皆と仲よく遊べるかしら、お行儀は大丈夫かしらと心配しましたが、思ったよりスムーズに入っていてホッとしました。日本に帰れば、また日本の生活になじんで、覚えた英語もほとんど忘れていくようです。親が心配するより、子どもは自分の置かれた環境に、それなりに適応していくものだと思えました。

このアメリカでの体験が、これからどのような影響を与えるのかまだわかりませんが、圭佑の中にはいろいろなものがあると思ひ出と共に残っていることと思います。

アメリカの幼稚園最後の日、サヨナラ・パーティーを開いて下さり、別れを惜しみました。圭佑は先生からお別れのキスを受けて、照れながらも満足気でした。私も親として、限られた期間の中でも、できるだけ楽しい幼

稚園生活を送ることができるよう、またいろいろなことを教えようと常に手を貸して下さった先生方に感謝の気持ちでいっぱいでした。

過ぎてしまうと短い期間でしたが、親子共、様々な経験をしました。厳しい自然環境と、その中でたくましく生きる人々に会い、旅行先では、スケールの大きい、豊かな自然を満喫することができました。おかげで圭佑は、動物や自然に対する興味を大いに深めたようです。

また、生活習慣や考え方、人間関係など、さまざまな違いを肌で感じる事ができました。

これからの国際社会に生きる人間として、大きく、豊かに成長していく上でこの体験を通して得たものが、良い糧となれば、と願っております。

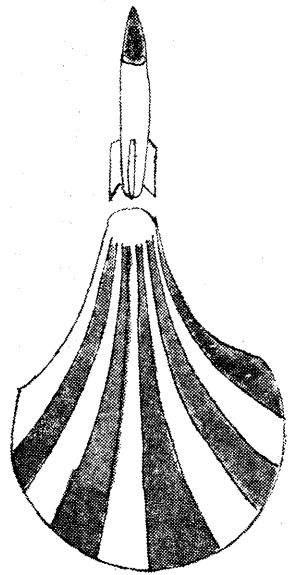
再び “保育の中の小さなこと”

大切なこと” (2)

守 永 英 子

保育室の中にいた私のところに、K子が花を摘んで見せにきた。新学期が始まったばかりの春の庭は、片隅の雑草もかわいい花をつけ、子どもたちは花摘みを楽しむことができる。

K子は三年保育からはいった二年目の子どもで、おとなびて、きついところがある。自分のことはよくできるが、人との関係は、あまりなめらかではない。相手が自分の考えとちがうときは、「○○なのよ。そうに決まってるわよ」と激しく自分の考えを主張し、相手を否定し



た。このいらいらした言い捨てるような言い方は、K子の特徴的なものであった。

そのK子が自分の方から、触れ合いを求めてきたのである。「かわいいお花ね。どこで見つけたの？」と答えながら、私は、K子のこの穏やかな気分の働きかけを貴重なものと感じ、このかかわりのときを、もう少し持ちこたえたいと思った。

「みんなにも “K子ちゃん” とか “N子ちゃん” とか、お名前があるでしょ。このお花にも名前があるのよ」と

いう私に、K子は「おもしろそう」という表情をみせた。

「K子ちゃんのお花と似ているお花があるかしら」と本棚から「野の花」の絵本を取り出し探し始めると、K子は興味をもつてのぞきこんだ。そして、私と絵本の間を割り込み、さり気なく私のひざに腰かけた。

どうしたことか！ 私の心に驚きが広がった。K子は、かつて甘えといえるような仕草をみせたことはなかった。おとなの手を振り払い、自分で出来ることを誇る子どもであった。そのK子が……と思う驚きといっしょに、先日のことが思い出された。数人の子どもと庭に出たとき、ふと手をつなぎにきたのがK子だったのである。そのときも、軽い驚きを感じたのであったが、やはりK子は最近変わってきたようである。

「これじゃない？」と、K子は、自分の持っている花と似た花の絵をみつつけて、「はるじおん」と読みあげた。

「これ、「はるじおん」という花なのよね」K子は、花の名前を見つけて、とても満足した様子であった。そして、そばにきたM男が手にしていた小さな黄色の花の名

前も探しはじめた。何度もページをめくり、やっと黄色い花を見つけ、「これじゃない？」と言ったが、どうも葉が少しちがうようである。

考えがくいちがったときのK子の反応は予想できなかったし、それは決して楽しいものではなかった。私は重い気持ちになって、そつと言ってみた。「そうね。でも、少し葉のところが違うみたいじゃない？」「これよ。そうよ。そうに決まってる……」K子は言いかけて、途中で言葉を切り、穏やかに言い直した。「K子（自分のこと）はそう思うけど……」

私の心に、言いようのない感動が広がった。K子は、自分から意識して言い直したのである。「そうに決まってる……」と言いかけたときも、以前のような強い語調ではなかったが、それを更に言い直したのである。相手を否定することなく、自分の意見としての表現であった。私の心に、K子へのいとしさがあふれた。この一年の間に、K子は、やはり確かに変わってきているのである。

M夫の場合は、また違った形で現われた。M夫も三年保育からはいつている子どもであるが、昨年は「なかなか自分から遊べない、遊びに打ちこめない」ということが私の心にかかっていた。分別があり、おとなをこまらせることがなかったが、よく私の周囲にいて、他の子どもを「あんなことしてる。あんなことしちゃいけないだよ」と私に同意を求めた。ときに「ねんどうをして用意しても、少しさわってみるだけで、じきにやめてしまう。」

このようなM夫の様子に心を悩ませながら、かわり方を考え、工夫してきた一年間であったが、なぜ、そのように気にかかるかといえは、それは、M夫の本来の姿と、現実の生活の中でのM夫の姿とのずれを感じていたとでもいえるだろうか。

五月の連休が明けて間もない日であった。M夫は、いつものように早く登園してきた。そして、私の顔をみる

や、「幼稚園は絵本しかないから、つまらないなあ」と言うのである。「絵本ばかりだから……」

このM夫の言葉は、私を驚かせた。遊べない子どもといっても、去年一年の間に、いろいろなことをしたではないか。砂場、ぶらんこ、ねんど、積木……そして、男の子たちは、特に、ルールをつないで汽車を走らせることが好きであった。M夫も、いろいろな遊びを経験したはずである。そのM夫が、「絵本しかない」と言う。

突然の出来事に、私には、そのことの意味がのみこめなかった。とまどいながら、後からきたK夫に、「幼稚園には、沢山遊ぶものがあるわ。K夫ちゃん、M夫ちゃんに何があるか教えてあげてね」と言うのと、まじめなK夫は、「自動車もあるし、砂場もあるし……」と指さした。M夫はその方に目をやったが、また私の方に向き、「だって、朝来てすぐお外(庭のこと)に行ってもいいの？」と問いかけた。

私は、ここでまた、びっくり。今まで、どの子どもも、「おはようございます」と言って、手を洗い、うが

いをすませると、すぐに好きな活動を始めていたではないか。一年間その様子をみてきたのではなかったか。

「いいのよ。どうぞ」という答えに、M夫は、すぐ砂場に出ていった。それから一時間ほど、M夫は砂遊びに熱中し、部屋に戻ってこなかった。M夫が周囲のことを気にしないで、一つの遊びに打ち込んだのは、これが初めてのような気がする。何かが、ふっ切れたようであった。

この不思議とも思える出来事は、朝の出会いのほんの小さな一コマである。が、M夫はこの日を境に、はつきりと変わっていった。このことは、M夫にとって、どういう意味をもっていたのであろうか。M夫は、「自分がとらわれていたもの」と「周囲の情況」とのずれを、修正してもう一度とらえなおし、確認したのであろうか。そして、「とらわれ」から解放され、「心に自由を得た」のであろうか。興味深い出来事であった。

M夫のことも、子のことも、毎日の保育の中では、小

きな小さな一コマである。しかし、K子の言いなおしも、M夫の不思議な言葉も、子どもの心の変化の、確かな証であり、保育者にとっては、素晴らしい感動であった。

子どもの小さな変化にも気づくとき、保育者のその子どもを見る目が変わり、保育者の目が変わるとき、それを受けて、子ども自身の「自己」のとらえも、また変わっていくのではないだろうか。子どもの行動の根底に、子ども自身の「自己」のとらえが大きく横たわっていることを考えるとき、保育の中の、小さなことの、大きな意味をしみじみと思うのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

若いお母さんたちへ

—ゆだねつつ育てるということ—

はるにれの会
入江礼子



この会のメンバーによる連載も、今回で九回目となりました。まずはじめに、ちよっぴり我が家の紹介をしておこうと思います。自宅は、千葉県の上原市という臨海工業地帯を持つ町の社宅団地の中にあります。結婚直後からこの地に住んで丸九年が経ちました。団地の中では、子どもの数が増えるのはほぼ時を同じくして二DK、三DK、そして現在の平家の一戸建と二度の引越をしました。家族は、三十七才の夫。この工業地帯の一角にある工場に技術者として勤務しています。私、三十四才。長女を身籠った時から専業主婦。長女A、小学二年生。長男T、幼稚園の年長。二女K、三才。こ

の五人で毎日生活しています。この社宅団地は、その性質上、比較的若い層が多く、「犬も歩けば、子どもと身重の人にあたる」という特徴を持っています。子育て中の人が多く、老人といわれる年令の人は、殆んどと言ってよい程住んでいません。そんな場所ですから、Aの生まれた時など、同年令の子どもが十指に余るくらいおりました。アパートの間は、社宅内にある公園が主な遊び場、一戸建に移ってからは、庭と御近所の家庭が主な遊び場になりました。公園で遊んでいた頃は、親共々外へ出ていました。そして今は、親がついて遊びに出ることは余りなくなっています。

今回は、そんな我が家の長男のTの日頃の様子から、私が育児というものを、自分以外の人に安心してゆだねることが出来るようになってきた過程を振り返ってみましたと思います。

「お隣りさんちに行ってきたーす。」Tはこの一言を残して、我が家の裏にあるOさん宅に飛び出して行きました。今の今迄AやK、それにお友達と遊んでいたのです

が……。それから二時間半後、夕方の五時過ぎ、Tは「ただいまーっ。」の大声と共にニコニコして帰ってきました。家をあげ、Oさん宅にお邪魔している間に、何があったのかその時は、知る由もありませんでしたが、心が満ち足りて帰って来たことだけは、私にも感じ取れたのでした。そういうことが、一ヶ月の間に三、四度あったでしょうか。ふと気付いてみると、Tが自分より幼ない子ども達、例えば妹のKや、そのお友達のN子ちゃん、S子ちゃん、そういう子ども達の面倒をみながら（ここで面倒をみるというのは、例えばその中の一人がぐずったとしますと、Tは自分のしていた遊びをちょっと横に置いてそこへ行き、あれやこれや提案したり、要求を聞き入れて泣き止ませ、又遊びのリズムを取り戻すということです。）自然に遊ぶようになってあることに気付きました。その八ヶ月前だったでしょうか、私は当時ベターホーム協会という所で、お菓子の講習を受けていました。その日は子ども達を預って下さる方の都合がつかず、当時二才になったばかりのKと、四才八ヶ月だった

Tを連れていき、二時間半の間、託児室で預ってもらったのです。講習を終えて迎えに行くと、Kはワッと泣いて私に飛びつき、Tは、もう帰るのかという表情で私のところにやって来ました。託児室の方は、「妹さんは、お兄さんに頼りたくて、ターちゃんと言って寄っていくのですが、お兄さんの方は、自分の遊びに忙しくて知らん顔なんですよね。それで妹さんは、泣き寝入りをしてしまいました。」とおっしゃったのです。この時のみならずよくTは遊びに没入してしまって、まわりのこととは没交渉、ということがよくありました。年相応といえは相応なのですが…。という具合で、それまではTが年令の小さい子どもと、それなりに遊んでいる場面には、殆んど出くわしたことがありませんでした。それが先程述べたように裏のお宅に何回か遊びに行くようになったあと、ちょっぴり大將っぽく遊べるTになっていたのです。

ここでこれまで五年間のTの我が家での位置についてちょっと述べておきましょう。Tは、姉のAとは一才九

ヶ月違い。実質的には年子と言えます。生まれた時からAがいつもTの傍にいました。その姉が幼稚園に入ってやっと私と二人だけの時間が過ごせるようになって間もなく（約二ヶ月半後）妹のKが生まれました。Tはこうして家では常に姉妹と一緒におりました。私と二人きりで飽きるほど遊んだという経験は皆無に近いのではないかとさえ思うほどです。その為でしようか、夜、眠る間際になると、「お母ちゃま、だーいすき。」とか「背中が痒いからかいて。」という風に、昼間甘えられなかった分をそういう形で出して来ることが多いのです。AやKがそういうことが殆んどないと対照的です。ところが昼間は私を要求せずに一人で遊んだり、同年令のお友達と遊びに没入しています。私がTに呼ばれるのは、彼が「作り物^{つくもの}」という主に工作の類をしたり、オマケの自動車やらロボットを作る時に、どうしても出来ない部分にぶちあたると時ぐらいます。それすら五才の声を聞いてからは、余りなくなりました。昼間ぐずるのは、お友達の家に行きたくても一人で行かれない時です。姉

に比べると早い時期からお友達の家で遊びたがり、私の都合などでそれが叶えられない時は大声で泣きまくるといふことがよくありました。しかしこれも、自分で行かれるようになるのと大部減ってしまいました。

とまあ、そんな具合なのですが、ともかく家にいる時はT一人ということは殆どなく、必ずどちらかの姉妹がいます。その為かどうか、Tには、私共が「サンドイッチコンプレックス」ではないかと思うようなことが時々ま起こります。例えば昨年夏、夏休みがはじまり、それまで学校に行っていたAと、幼稚園に行っていたTは、久し振りに一日中姉弟で過ごすようになりました。まずはじめに起ったことは、「大喧嘩」。それもA主導型の口喧嘩です。Tは男の子の割には喧嘩の際、手を出すことが少ないのです。勿論、同年令の男の子とする時には派手に手足を使って喧嘩するのですが、こと口喧嘩となると口達者な二才年長のA相手ゆえかありません。それでついにたまりかねてヒーッとひっくり返って泣くこととなります。そんな喧嘩が日に数回繰り返されたあと

(約一週間)、嵐が去るように姉弟喧嘩は姿を消しました。やれやれと一息ついて見守っていると、八月に入るところから、Tが吃りはじめたのです。勿論本人は気付いていない様子でしたが大人には、それとはっきりわかります。更によく注意していると、特に多いのが「ア」を発音する時、Aの一番上の文字です。最初のうちはどうしたんだろう、どうしたんだろうと思っていました。が、これだけ姉弟とひっついていては、よく遊ぶといってもA主導の遊びにひっついては吃るのも当然と思うようになりました。Tはそういう症状が出ながらも、Aと水風呂に入って遊んだり、相変らず見た目には、とつとも楽しそうに遊んでいるのです。真夏の三週間、吃ることは続きました。そしてそろそろ学校に戻る準備がはじまった夏の終わり頃、日によっては吃らないことがあるようになりました。Tの友達も団地に帰って来て、そちらに遊びに出向くことも徐々に多くなってきました。そして九月はじめ、幼稚園のはじまる頃には、吃りは消失していったのです。担任の先生にもその旨伝えた

ところ、幼稚園では全くないと驚かれた程、その消失は劇的でした。このような夏休みを体験して、私はきょうだいのみで過ごす、楽しくはあっても、Tにとっては安住の地ばかりとは言い切れないのだと改めて思ったのです。それだけではありません。こういうTには、本当にお友達、それも同等に遊べるお友達が必要です、外で遊ぶことも重要な位置をしめているようなのです。

更にもう一つ、こういう事がありました。年が明けると、Tも遅ればせながら字を覚えようという気持ちがかムクと頭をもたげて来たのです。ノートと鉛筆を渡すと、自分の名前から読み書きしはじめました。するとどうでしょう。Aがやって来て「あっ、ターちゃん。字の練習はじめるの。それなら私が一年生のはじめの時に使った書き方のノートがあるからそれ見たら？ それに「た」の字はそう書くんじゃないよ。もっとこうしなきゃ。あやなんか四才の時に、もう少し上手に書けたんだよ。」と、もう機関銃のごとくしゃべり、好意から出た言葉（いえ、もしかすると、追いつかれようとする者の焦

りの言葉だったかもしれないのですが）とは言え、さすがのTもうんざりしたのか二三日自発的にしていた読み書きの練習も、以後パツタリとしなくなりました。空白の二ヶ月。たまさか自分で書いていても書き順、読み方など一切聞こうとせず、まるで写し絵をしているのと同じように字を書いています。「この字はこう書くのよ。」などと言おうものなら「いいのっ」と言ってパツッとノートを閉じてしまいます。そういう様子を見るうちにととうとう本当に読みたくなったのでしよう、今度は書き順と読み方をきいてくるようになりました。但し、Aが登校してしまった時間からTが幼稚園に行くまでの朝の間です。Aがいる時間には、絶対にやろうとしません。そういうことが数日続いた後、たまたまAがTの書き散らしているノートをのぞきました。「へえーっ、ターちゃん随分上手になっているじゃん！」と言うのです。それを聞いたTはニッコリ。こうなるとさすがお団子のようにくっついて育った姉弟、私に聞くより姉に聞いて、Tはその覚えるスピードを増しました。

Tにとって新しいことでもAにとってはもう終えたこと。そういう意味では、Tはいつも後についていく立場です。その割に今迄こういうぶつかりあいが少ないのは、Tが熱中しているものは、殆んどの場合、Aが遊んで来なかったものや、してこなかったことに集中しているからです。夜、私などに本を読んでもらうことが好きなのが共通しているくらいで、あとは、ほとんど重なりません。きょうだいの生まれ順は運命とは言え、年のついていくきょうだいの確執は、私たちが想像する以上のものようです。Kに関することでもAが居ればお姉さん役は常にA。Tは上でもKと同等扱いで、兄として腕をふるえる機会は、それまでほとんどありませんでした。

そんなこんなで育ってきたTですが、今思うと、TはTなりにそういう環境からの息抜きの方法を、知らず知らずに体得していったように思うのです。その一つが幼いお子さんのいる御近所におじゃますることです。冒頭の方で述べたOさん宅には、一才半になる女の子がい

ます。Tの対等の遊び相手としては物足りないはずなのに、そういう所へ行つてホッと息抜きをしてのんびり遊んで来るのです。きっとそうするうちに普段フル回転しているTの心のエネルギーが充電されるのだと思います。Oさんも、はじめTが来た時には、正直のところちょっとびっくりしたと言いました。「おうちで何かいやなことがあったのかと思つたわ。でも遊びに来たいんならM（その女の子）では力不足と思つたけれど、ターちゃん（お子さんの名）の気の済むようにと思つたの。」とTを迎えてくれました。

私はこの頃になって、やっとこのように、自分の手の離れたところでも子どもは育つと、心から思えるようになって来たのです。それまでの道程には長いものがありました。Aの妊娠が解つた時点から、私は専業主婦でした。そして「自分の」子どもが出来たら二十四時間私の手で育てたいと切に思っていました。それまで子どもに触れた体験は多少ありましたが、二十四時間というのはじめてです。例えば、今迄実習生という立場しか持

てなかったものが、幼稚園の担任をはじめて任された時の気負に似ています。そしてAの出産。その後は、私自身の母に何回かミルクをたのんだのと、熱で半日寝込んで夫にたのんだ以外、ほとんど自身の手でして、入浴させるのもわかりです。そういうことが自分の手で育てるということだと思っていました。本当に恥しいことですが……

けれど、それが驕りであり、不可能であることを悟ったのは、Aと二人きりでむぎあって遊んで、お互いに息が詰った体験をしたことと、Tの誕生でありました。それでも私は、その頃、やはりAは手離しきれなかった、いや私の方が離れられなかったと言えます。以前に比べれば自分一人ではかかえきれないということが少しずつわかりはじめてはいたもの……。そして三人目のKの誕生。この時点で我が夫は完全に育児要員になりました。彼の助けなしには（単に経済的に扶養するだけでなく）その一年間は乗り切れなかったと思います。

と同時に、近所の方とのつきあいが今迄以上に必要だ

と痛切に感じるようになりました。ここは社宅団地だと前にも述べましたが、親しくなっても転勤あり、念願のマイホームを建てて出て行く方ありで、永続的な関係というのは、なかなか望めません。現に、十指に余る程いたAと同年齢の子ども達も、今はすべて住む場所が変わっています。それでもやはり親しい方を作ること、少しでも自分の子どもと同じように扱ってくれる方をつくり出す努力は必要だと思うのです。自分の子どもと同じように扱うということの意味の中には、その子の親に遠慮せずダメなことはダメということ、又、相手に気兼ねする余り、自分のこともばかりしかることをしないということが大きくあります。コツコツとそういう関係を日常の中で積み上げて行くうちに、子どもがよそのお宅にお邪魔しても追いかけたり、口を出さずにいられるようになると思うのです。むしろ親という時よりも、親のいない所でこそ伸々と育っていくこともあるものだと思うことも多くなりました。TがOさん宅にお邪魔するうちにそういう力を蓄えたように。

ここでもう十年以上前、私をはじめて幼稚園の年長組の担任をした時に出会った出来事をひとつ挙げて結びにしたいと思います。

その組のK君が腕力といささか暗い感じの強いN君という子からの手出し口出しをのがれて、何ヶ月か、毎日のように三才児のクラスに通ったことがありました。そしてそこで過ごした後、自分のクラスに戻ってきた時には、もうN君のことを恐れず対等に対峙出来るようになったのです。腕力ではまだかまいませんでしたが、気力がまさり、理不尽なことに対してはむかっていくようになりしました。クラスの中で解決出来ずにしまったことは、私の力量不足を見せつけられた思いで落ち込みましたが、子どもが自ら選んで、そして私もまたそういう状況にさからわずにゆだねた結果がそういうことであったのです。

一度体験したはずなのに、人の親になると又、欲が顔を出し、それが、親と子の成長の機会を妨げる結果になってしまっていたのです。子どもを人にほんとうにゆだ

ねることが出来るようになったことは、親としても一つの成長に思えます。手放し、ゆだねて見守ることが、こんなにも難事業であるとは、想像もつきませんでした。でも、今、子どもの成長を目のあたりにして、目にみえるものみえないものに見守られて、子どもははじめて育つものだと思うのです。



白い文字

蕪木寿江

「かぶらぎさん。とおっしゃると、どういう字ですか？」

「あのう、草かんむりに『む』です」

「珍しい字ですね。『ム』こうですか？」

「いいえ、草かんむりに、『な』です」

「？」

「なんにもないの。ないです。大根、かぶのかぶです。野菜のかぶです」私は手で丸くかぶの恰好をする。

「すみません、書いて下さい。」と言った具合で、以前住んでいたところでは見あたらぬ名前前で、お米屋さんの小僧さんが大僧さんになり、お嫁さんを貰って田舎に帰るまで、「なしきさん」で過ごした。「なしきさん、お米を入れておきましたよ。」台所に入って米櫃を開けて、少なくなった古い方のお米を蓋にのせて、新しいお米を入れて帰って行ってくれ

る。無くなる頃になるといつの間にか来て満していつてくれた。おかげで米なしデーが続くこともなかった。

たまたま行った外科では、「むきさん、第二診察室に入ってください。むきさん、むきさん、いないんですか。」と、看護婦さんのむきになって叫ぶ声に、はっと驚き、恐る恐る診察を受けたこともあった。

「ぶきさん」と呼ぶのも、全く不器用な私にはふさわしく、又「ブキさん」と、仮名におきかえてみると、又又、似つかわしい。戦後の混乱とした無気力な時代に、一世を風靡したハイハイブギウギの歌を思い起すからである。ちょっと学のありそうな人は「かぶきさん」と呼ぶ。役者になったようだ。詠えの洋服のネームには、「鎗木」というものもある。鎗木清方の子孫のようで少し偉くなったような気がする。

主人の両親の生まれ育った市ヶ尾に越して来てからは、蕪木の姓も多く、その後名付け親もない。教材屋さんが電話で、「先生のお名前は？」と必ず聞く人がいる。「かぶらぎです」というと、「はあ？」と聞き返す人には、「あぶらげです」という、「あぶらげ先生ですね」と念を押す。ご父兄の中には「蕪木」と書く方に毎年出会う。十年来、年賀状に母娘で書き続けている。これもしかり——、いつも駈足で走り廻っている私には恰好な名前である。蕪という字は、芭蕉の蕪であり、蕪という字は、蕪村の蕪であってみれば、俳界に縁もなくもないとか……そこで一句、などと笑うこともある。

昼寝覚め 横向きおれば片眼寝むし

つまぐりて鬼灯の種白く浮かす

笑いたくて蟻螂の貌見ていたり

子等より浮くる砂のだんごと秋の陽と

祝い菓子頬ばり食みて卒園す

大風邪をひいて幼稚園を二日休んだことがある。私が癒って出てくるといふ朝は、小燕共が門の所で待っていてくれた。飛びついたり、ぶらさがったり、ぶったり、押したり、ひっぱられながら部屋迄やっとなどついた。一日が無事に終り、原っぱをぬけて帰るうとすると、木製の物と取り代える為に以前から置かれてあった電柱に何か字らしいものが書かれてあるのに気がついた。「かぶちゃん、かぶちゃん、かぶちゃん………」と、長い電柱が絵のような文字で埋まっている。石を探して書いたのだろうか。私は一つ一つ丁寧に、かすんでくる目を拭きながら読んだ。電柱の終り迄くると「なおてね」と、はすかしそうに小さく書いてあった。——なおてね——。まさに

*子供は一冊の本である

その本から

われわれは何かを

読みとり

その本に

われわれは何かを

書き込んで

いかなければならぬ

子どもは神の被造物である。子どもから学ぶことのみ多く、一人、一人の本に、一人一人に書き込んでいかなければならないと思いつながら、一体、何を讀みとり、何を書き込んできたのだろうか。

草はらに横たわっていた電柱に浮きでた白い文字が、十数年経った今も、鮮やかに刻み込まれている。

*一九五三年の夏、当時まだ米英ソ仏四か国の占領下にあったウィーンに会議があつて、二週間ほど滞在した。そのとき、とある幼稚園を羽仁説子さんと二人で訪れて、帰りぎわに、その幼稚園の男の子がおんぶしてというので、おぶって白壁のわきを歩いてきたら、その壁にコンテのような濃い黒で「Das Kind ist ein Buch aus dem wir lesen, und in das wir schreiben sollen.」(「この子は、
本——)が無造作に書いてあつた。後日、この詩が、ペーター・ローゼッカーという、第一次大戦末に死んだ、オーストリアの人に愛された詩人であることを、ドイツからの或る手紙でわかつた。(周郷博著 母と子の詩集より)

(神奈川・市ヶ尾幼稚園)

子どもたちのこと

十一、ザリガニの赤ちゃん生まれたよ

大橋 利 恵 子

R子は小さな声で話をする三月生まれ4歳の女の子である。いつも周囲の子の遊びを見ていたり、一人で絵を描いたりしていて、なかなか友達の中に入っていけなかった、食事や身のまわりのことも他の子がするのを見てからしているので、どうしても遅くなりがちの消極的な子である。そんなR子に私は、「このままではいけない。何とかして遊べるようにしなくては……」という

気持ちをいただき、何かといらぬ誘いかけをせっせとしていた。何故いらぬとつけたかと言うと、あの日「R子はこ

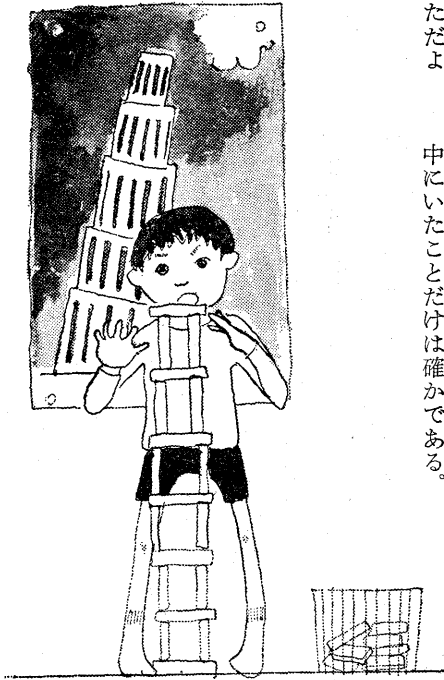
うして自分で遊んでいるんだ」と実感できることがあったからである。

当園のまわりには、まだ田畑がたくさんあり、草花や虫、カエル等小動物が子どもたちのよき遊び相手になれる環境が残っている。みんなで園外に出かけていって、それらのものをみつけたり、取ったりしてくる。特にザリガニは小さな水路にもたくさんいて、子どもたちには格好の遊び相手である。いつもバケツとたもを持ってつかまえに行くと、ほぼ一日をついやして来てしま

う。そして、つかまえてきたザリガニをタライで飼い、世話をしながら、手でつかんでみたり、歩かせたり家を作って入れてみたりして、あきずに遊んでいる。ある日、いつものようにつかまえてきたザリガニの中に、足にたまごをいっばいつけたメスがいた。さっそく一匹だけ別にしてバケツにいれ大切にしておくことになった。

誰がというわけではないけれど、毎日誰かがその小さなバケツをのぞいていた。言葉に具体的にはならなくても、みんなが楽しみにしているという雰囲気があったよ

っていた。そして、とうとう、ごく小さいメダカのような赤ちゃんがたまごから出てきたのを男の子が見つけた。(受精卵でよかった!)「生まれた、生まれた」とさわぎはだんだん広まっていきみんなが集まってきた。みんながバケツをのぞいている時に、私も夢中になって一緒にのぞいていたので、その時、R子が見ていたか、何をしていたか正確にはわからない。けれど、そのバケツの周りの輪の中にはいなかったことと、保育室の中にいたことだけは確かである。



さて、みんながひと通り見てさわぎがおさまり、バケツも定位置にもどされ、もうしばらくはそっとしておいてあげよう、ということになってから三〇分もたった時のことである。R子が、すごく目をかがやかせて「先生！」と手をひっぱる。R子の方から、こんなに元気に呼びかけられたのは初めてだったので、内心びっくりしながら「どうしたの？」と聞くと「ザリガニの赤ちゃんが生まれているよ！」と本当に今、大発見をしたということがわかる様子で言ってくれる。みんながあんなにさわいでいたのにといい気持より、R子は自分でバケツをのぞいて、赤ちゃんがいることに気づいて、いそいで報告にきてくれたのだ。あんなに何もしないで困ったと思っていた子が、自分でみつめてきたということの方に私はおどろいた。そして同時にR子が遊んでいないとか、みんなとテンポが一緒じゃないという事は問題ではないことに気づかされた。R子はR子のテンポで生活しているのだということがその時わかったのである。

以来、私のR子に対するいらぬ誘いかけはなくなっ

た。そして、R子も徐々に友だちに近づくようになり、今は唯一H子だけがR子の目標である。かけっこをするのも、食事をするのもH子と同じスピードでやろうと努力しているとお母さんからも聞かされた。H子も活発な方ではないので、こちらから見れば何とも頼りない二人組なのだけれど、R子が、自分一人の世界から、H子と共の世界に成長してきたことをうれしく思い、こうして段々にR子が成長していってくれることを楽しみに見守っていきたいと思う。

(岐阜北幼稚園)

「非知」と「非力」に希望を見る

M
・
H

新しい時代の希望は、子どもと老人の「非知」と「非力」にあるというなら、それは余りにも逆説に過ぎるだろうか。しかし、競い合うことでしか「ちえ」と「力」を発見し得ぬ不幸な時代にあつて、「非知」と「非力」は特有の光彩を放ちながら、私どもの前に新しい望みの灯を掲げてみせているように思う。横行する現実知や現存する力を、批判するのではなく、ましてや否定などせず、ただし、さわやかに無縁であること……。あるいは、そのいずれをも無化して彼ららしくあること……。いま、「子ども」に、救済の望みが託されるとしたら、

それは、彼らがよき可能性の体現者だからでも、未来をになってくれるからでもなく、「非知」と「非力」を生きることの出来る特有の存在者であることのゆえではないか。人間が打ち立てた価値の体系は、その中心に「ちえ」と「力」を置いているのだが、それに未だ所屬しないもの、あるいはそれらから身を逸らしたものだけが、そうした体系を相対化し、無化することが可能である。そして、それら存在者は、「子ども」と「老人」に他ならない。彼らのありように、硬直化した現代から脱却する新しい道が見出されるとするのは、この所以なの

だ。

ミヒヤエル・エンデは、昨春上映された映画『ネバー
エンディング・ストーリー』によって、一躍話題的とな
った作家であるが、一九七〇年代から、『モモ』とい
う作品の邦訳によって、一部の知識人からは熱いまなざ
しを注がれていた。そして、映画の原作『はてしない物
語』は、広く世界の若ものたちに愛読され、聖典視され
さえしていると言う。日常的現実の裏側にあつて、私ど
もの世界を支えるもう一つの現実「ファンタジー」、
そこが虚無に侵され、滅亡に瀕しているとの設定で、物
語の幕は切つて落とされ、ファンタジーを救済すべ
く、二人の少年が活躍する。一人は、ファンタジー
の住民、緑の肌族の少年アトレイユであり、いま一人は、
人間の少年、バスタアンである。二人に襲いかかる危機の
数々とめくるめく冒険……。結果として、ファンタジ
ーの滅亡はとりあえずは回避され、主人公の少年も
「死と再生」の旅を終えて現実世界に戻ってくるという

形で、長い長い物語は幕を下ろすのだ。ファンタジー
の滅亡は、人間世界をも枯渇させるという設定である
から、人間世界も、一応はよみがえりの機会を与えられ
たのであつた。

この物語は、発表と同時に多くの論評を集め、さながら
エッセイのたまし絵のようなその構造や、「虚無」
や「幻想」にかかわるメッセージ、あるいは、ちりばめ
られた多彩な寓意など、様々な視点から作品論が展開さ
れて今日に至っている。子どもの本の体裁をとっては
いるが、頁数五八九、定価二八〇〇円の大部の書物が次々
と版を重ねているのは、読者が子どもではなく、読書力
に秀でた大人たちであることの証でもあるうか。作者自
身が「メルヘン・ロマン」と定義するこの作品は、児童
文学の形を借りることで、現代の様々な問題を、最もシ
ャープに掬い取つて見せていると言えよう。

ところで、私は、この作品の不可思議な中心、「幼

ころの君」と呼ばれるファンタージェンの女王に焦点を当てて先ず、その意味を読み砕いておこうと思うのだ。

幼ごころの君は、先の二人の主人公、アトレューユとバスタアンンの背後にあつて彼らを生かし、彼らにその使命を遂行させる非行動的な中心であつた。というのは、ファンタージェンに虚無が蔓延し、滅亡の不安に脅かされているのは、この女王が病気で日一日と衰弱していくからであり、ファンタージェンを救おうとするなら、女王の病気を直す方法を見出さなければならないのである。アトレューユらが冒険の旅に出ていったのはこの女王のためであつたし、また、数々の危険をくぐり抜けることが出来たのも、女王から託された「アウリン」と呼ばれる女王のしるしのおかげであつた。従つて、行動したのは二人の少年なのだが、その行動を促したのはこの女王だったのである。幼ごころの君こそは、ひっそりと裏側に隠れた、ただし、物語全体の要としてその展開を促す、真の主人公と言えるかも知れない。

幼ごころの君は、病身の、消え入りそうにたおやかな

一人の少女であつた。作者エンデの筆を借りれば、彼女は、次のように形容されている。

「幼ごころの君は花の円蓋の中で、丸く、ふんわりしたクッションの上ですわり、さらにいくつものクッションに身をもたせかけてアトレューユに目を向けていた。この上もなくたおやかな、尊い宝のようだった。顔はすきとおるほど蒼白く、病がいかにかを思わせた。アーモンド型の両の目は濃い金色で、心配や不安の影は露ほども見られず、にっこりとほほ笑んでいた。きゃしゃで小柄な体は、もくれんの花びらの白さもくすんで見えるほどの純白に輝くゆつたりとした絹の服に包まれていた。見たところせいぜい十才くらいの、いうにいわれず美しい少女のようだったが、きれいにくしけずられ肩から背へと波うちながらクッションにまで届く長い髪は、雪のように白かつた。」

こんな弱々しい少女が、ファンタージェンの統治者であり、しかも、ファンタージェンの存亡は、人間界のそれと不可分の関係にあるということであれば、究極的に

は人間界の統治者でもあるのかも知れない。そして、その統治のしかたは、歴史上のあらゆる王や女王、さらに物語世界の王様や女王様のイメージをくつがえす、全く異ったありように描き出されていた。すなわち、彼女は、王座にありながらも支配者ではなく、中心でありつつも権力を行使せず、命令せず、裁かず、攻めることも守ることもなかった。にもかかわらわず、「すべての生きもの、善なるものも悪なるものも、美しいものも醜いものも、おどけものもまじめなものも、おろかなものも賢いものも、すべてみな、この幼ごころの君が存在してこそその命だった。この君なしには、何一つ存在しえないのだった。それは人間の体が心臓なしにはありえないのと同じだった」のである。

ファンタージェンでは、すべてのものが、表と裏、光と影のように一對をなして出現していた。アトレーニとバスタアンを組み合わせも例外ではない。召命を受けた者の潔さにはすがしく輝く妖精少年アトレーニと、ぐずで不健康で学校嫌いの、落ちこぼれ少年バスタアン：

。しかも、この二人は、それぞれに相互がお互いを分身としていて、両者は不可分にその生を共有している。どちらがよいとか、どちらが正しいとかいうのではなく、どちらもそれぞれに存在せねばならないのである。この国では、幼ごころの君の下に、善と悪、美と醜、賢と愚などの組み合わせが、二元論的対立ではなく、不可分の対として存在し、対立に依拠する価値体系と序列が、徹底して無化されていた。存在は、すべて存在するがゆえに肯定されて受容され、あるがままに生かされている。そして、その中心にあって密やかに息づくのが、この病身の女王であった。徹底して「力」を振るうことのない、というより、振るうべき「力」を持たない弱々しい少女の統治者……。世界が、対立と序列化から逃れるためには、「非知」と「非力」に依る以外に道はないということだろうか。この女王が「幼ごころの君」と呼ばれるのは、恐らくは、「非知」の象徴であろうし、華奢で病気の身体を与えられているのは、「非力」の表現に他なるまい。この君は、「救い」にかかわる固定観

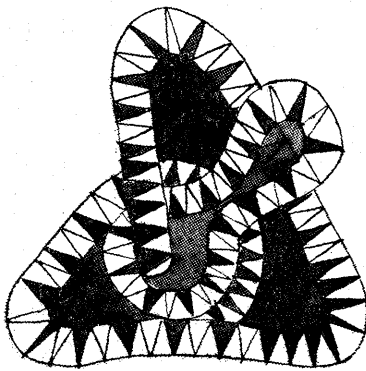
念を退け、「統合」にまつわる既成概念を無化しつつ、「救世主」そして「統治者」のイメージを、全く新しく描き変えて見せているのだ。



「非知」と「非力」による救済のメッセージは、作品の随所にくり返され、主人公たちは、ちえと力を捨てることによって新しい道にふみ出すことを得る。たとえば、アトレイユが、ウヌララの予言を聞くべく、三つの門を

くぐる場面がそれであった。

すなわち、第一の門は、「大いなる謎の門」と呼ばれてスフィンクスによって見張られている。スフィンクスの眼光は、それに触れたものを石化させる鋭さに輝き、容易にそこを通り抜けることを許さない。時にスフィンクスが目を閉じて、通過を許すことがあるとされているが、それがどんな時なのか、どのような理由によるものか、誰にもわかってはいない。従って、どうすれば第一の門をくぐるかが出来るのか、果たして無事に帰って



くることが出来るのか否か、アトレーユには何一つわかってはいないのである。

彼はとにかく第一の門に近づき、スフィンクスを見上げる。そして、彼は息を呑んで立ち止まるのだ。何故なら、それは余りにも偉大であり、謎に満ちていて、神秘の光に輝いていた。美が怖ろしいものでもあり、怖るべきものが美でもあるという、この戦慄に満ちた発見……。想像を絶するまでに壮大で、絶大な力を持ったものの实在への怖れに、彼は頭を垂れ、打ちのめされて、ただ、一歩一歩、足を進める以外にすべもない。通過が許されるか、自分の一生がここで終るのか、自分の力では如何ともし難いその歩みの果てを、大いなるものに委ねて、ひたすらに進んだとき、いつか門は彼を受け入れ、スフィンクスは彼を通してくれたのだった。

第二の門は、「魔法の鐘の門」だった。そこに映った思いがけない姿、それは、アトレーユのまだ見たことのない人間の少年バスタアンだったが、彼は疑うこともせず、ためらいもなく、その未知の映像を自分として受け

入れる。どんな見慣れぬ姿であっても、自分の前の鏡に出現したのは、自分以外の何ものでもあり得ないと素直にそれを肯定したとき、門は彼を受け入れ、そこを通り抜けることが出来た。

「鍵なしの門」と呼ばれる第三の門にたどりついた時には、生まれたばかりの子どものように、一切のちえと力から解放されていたアトレーユは、自分が何のために旅しているのか、どうしてここにいるのかさえ考えることなく、ただひたすらに晴れやかな気分で、軽々と笑っていた。取手も握りも鍵穴もないその門を、アトレーユは、左にかがみ右に近づいては眺め楽しみ、そっと近づいて撫でてみた。あかがね色にきらめくその光を、美しいと思いつつ、しばらくいじっているうち、門はするりと開いて彼を導き入れてくれた。

こうして、彼は三つの関門を突破し、目的を達することが出来たのだが、そのいずれの場合も、ちえや分別、自分自身の判断し意志する心、惑う心などを放棄し、己れを開き、大いなるものに委ねたことの所産であった。

ウユララの予言は、遠くから漂ってくる歌声としてア
トレーユの耳に訪れた。それは、澄んだ子どものような
声ながら、深い悲しみをたたえていて、彼の魂にしみ通
り、救済を約束してくれたのである。



従来の秩序社会は、二元論的対立の一方に正の価値を与
え、他を負と貶しめることで価値の体系を作り出し、そ
れによってすべてを整理してきた。すなわち、善を正し
いとして悪を駆逐し、美を位置づけるべく醜をさげす
み、賢に道を開くために悪を排除するという、こうした
整理のしかたである。しかし、こうした秩序体系の結果
したものは、「ちえ」と「力」を駆使した他者の否定に
他ならなかったのではないか。

善といい、美というも、所詮相対的でしかあり得ぬも
のを絶対とみなすことで作り出される絶対の差別……。
その結果としての抑圧……。正の位置を獲得するための
絶えざる競争……。私たちがこうしたありようから自由

になろうと願うなら、その道は、この体系の外にしか見
出されないだろう。従来の負の値を逆転させて正の位置
につかせたところで、所詮、それは、いずれまた逆転さ
れる東の間の勝者に他ならず、同じ構図の入れ変えに過
ぎない。二元的対立のいずれか一方を正とする、この構
図そのものを無化するためには、何ものをも否定せず、
いずれの優劣をも裁かない、徹底した「非知」と「非
力」にこそ救いがあるのではないか。

このとき、私どもの眼は、秩序の外に溢れ出し、「非
知」と「非力」に浮遊し得る子どもや老人の上に、新し
い光を見て、それに望みを託すのである。

自己の発達と泣きべそ

榎 沢 良 彦

前回、私はある一つのエピソードを解釈して、「泣きべそ」の意味を提示してみました。今回は、泣きべそという表出行為を、自己の発達、あるいは自己の構造との関係で捉え直してみたい。

一、自己とは

まず始めに、一般的に用いられている「自己」ないし「自我」という概念が問題になる。ところが、この両概念は一般社会においてと同様、学問の世界においても、

明確に区別されてはいない。研究者によっては、両概念をその人なりに定義して用いようと苦心している人もいる。しかし多くの場合、研究者の好みや立場によってどちらかの用語が使われているというのが実状である。私も、両者をほぼ同義のものと考え、ここでは「自己」という言葉を用いようと思う。

心理学的に、自己とは、意識の流れを担い、意識諸体験を統一している主体のことと考えられる。意識の主体でありながら、意識と共にいつでも体験されてしまつて

いる自己を、心理学的な発達という観点で問題にする時、一方で、私たちは「自己の機能」を問題にすることができる。他方、私たちは「認識の対象としての自己」を問題にすることもできる。つまり、自分が自分自身をどう意識しているのかということの問題にするのである。一般的に、自己の成立とか自己の芽生えと言う場合、私たちは認識の対象としての自己を問題にしている。実際には、機能としての自己と対象としての自己とは、切っても切れない関係にあり、両者は相携えて発達していくのである。

二、自己の発達

既述したように、自己の発達は二側面から考えることができる。一つは、現実に対して能動的、積極的に適応していく自己の発達、つまり適応機能の発達であり、他の一つは、自己意識の発達である。

自己は、主体と他者や事物を含めた外界との間の交渉を通じて形成されていく。最近の乳幼児研究によると、

赤ん坊は生まれた時から外界の刺激を弁別すると言われている。その点で赤ん坊は外界を知覚する機能を持っており、主体的な存在であるとも言えるが、この時期には、未だ十分に主体としての自己意識を持っているとは言えない。

機能はある程度生得的に個体に具わっており、その機能を通して主体が外界と交渉する過程で、自己の意識が芽生えてくるのであり、自己意識が豊かになるに伴い、自己の適応機能も発達していく。このように、適応機能と自己意識とは、一体を成して発達していくのである。

三、自己の発達における泣きべそ

一般的に子どもの自己の発生活おび発達は二つの時期を経て進むと考えられている。まず最初は生後三カ月頃までの時期で、これを「前共生期」と言う。第二の時期は、生後三ヶ月から生後二、三歳までの時期で、これを「共生期」と言う。

前共生期においては、子どもには未だ「自分」と「自

分でないもの」との区別がない。子どもは自分の置かれている環境の中に埋没し、それと融合した状態を生きている。また子どもは母親と他の大人とを明確に識別してもしない。この時期の子どもがどの大人に対しても愛想を振りまくのは、自己と環境とが融合していて区別されていないことによるのである。

共生期に入ってくると、子どもの認識が分化し、「自分」と「自分でないもの」との区別が徐々にできてくる。そして不特定の他者の中から、特定の人（母親）が子どもにとって意味を持つようになり、母子の間に強い愛着関係が形成されてくる。しかし最初の頃は子どもは母親を「他者」として明確に意識してはいない。子どもは母子融合状態を生きている。この時期の子どもにとっては、「母子の安定した共生関係」自体が自分の領域なのであり、広い意味での自己なのである。「八ヶ月不安」と呼ばれる人見知りの現象は、子どもに広い意味での自己の領域が生じてきたことを示している。

子どもは母親との共生関係を保ちながら、しだいに母

親を「他者」として認識するようになる。同時に、一個の独立した自分の意識、つまり自己意識が確立されてくる。その時期が生後三歳前後である。この頃現われる「分離不安」の現象は、子どもに狭い意味での自己が芽生えてきたことを示すものである。

自己が確立するにつれて、子どもは、それまで母親と共生し、これに依存していた状態から独立し、精神的に自立しようとするようになる。その現われが「第一次反抗」と言われる現象である。子どもは、現実世界の様々な障害や自己の葛藤等を、自分の力で克服できるようになってきたのである。このことは自己の機能の面から言えば、適応の機能が強化されてきたことでもある。

それでは、「泣きべそ」という表出行為は、この自己の発達過程においてどう位置づけられるのだろうか。

前記の前共生期においては、子どもの自己は未成立であると言える。子どもは自分の置かれている状況と一体となっているので、状況を理解した上で泣くということはない。ほとんど自分の生理的欲求や不快を訴えるた

めに子どもは泣く。当然ながら、この時期の子どもはほとんど無力な存在なので、生理的欲求を満たすためには、大声で泣く以外に方法がない。

共生期に入って、子どもが広い意味での自己の意識を持つようになるにつれて、子どもの泣き方は多様化してくると思われる。少なくとも、生理的レヴェルの泣きだけではなく、自分の存在感に基づく泣きも現われるようになる。例えば、不安に伴う泣きがそれである。

不安というのは、ハイデッガーが指摘しているように、本来的に人間の死に関連しているものである。つまり不安というのは、本来的に自分の存在の危機感の感情なのである。この時期の子どもが他者の接近によって泣いたり（八ヶ月不安）、母親との分離で泣くのは（分離不安）、子どもが自分の存在の危機を感じるからである。

この時期、子どもの自己は茫漠としたものであり、他者と十分明確に境界づけられた自己ではない。それは母親との一体感によって初めて成立するような自己であるため、外界での危機的事態は、直接的に子どもの自己の

存在を脅かしてくる。^(二)この場合、子どもは自己の存在の根源的基盤である母親に依存することによってのみ、その事態を乗りきるのである。

しだいに様々な能力が発達してきて、これまで出来なかったことも出来るようになる、子どもは有能感を持つようになる。自己についての認識も多面的になる。これらのことが自己意識の明確化と、現実への適応機能の強化を促す。

更に、子どもが言語を獲得するようになると、子どもは自分を客観化することができるようになる。ここにおいて、母子分離が促進され、母親は子どもにとって他者となり、子どもの中には個としての自己意識が芽生えてくる。この自己意識の確立は、子どもが自分の置かれた状況を客観的に見たり、その中に自分自身を位置づけたりすることができるようになってきたことを意味している。子どもは自分を客観化することによって、その状況の中で自分の取り得る行動の可能性を考えることができる。子どもは、母親依存一辺倒の時とは異なり、現実を

処理する多様な手段を講ずることができるのである。

泣くという行為も極めて多様化してき、その場の状況に応じて泣き方も変わってくる。野村は、五歳児になると、「くやし泣き」「こらえ泣き」等の自分の感情を抑制する泣き方や、「ウソ泣き」等の泣き方を子どもがするようになる^(二)と述べている。私が問題にしている「泣きべそ」は恐らく「こらえ泣き」に近いものだろう。

一方、機能の発達に裏打ちされた自己意識の確立は、子どもにも母親からの自立を求めさせる。黒丸は、この時期の分離不安を、母親から独立しようとする子どもの成長意欲と、なおも母親にしがみつこうとする依存意欲との間の葛藤の現われと捉えている。^(三)子どもは自立と依存という相反する欲求の境界に立つようになるのである。

一般に自己が確立すると言われる三歳以降になると、子どもは実に多様な泣き方をするようになる。その中の一つとして「泣きべそ」も挙げられる。しかし実際はもっと早い時期から「泣きべそ」は現われうる。

前回のエピソードの考察が示しているように「泣きべ

そ」は矛盾する気持の間の葛藤を表わすものと考えられるが、以上に述べてきた自己の発達に関連づけると、次のようになるだろう。「泣きべそ」は、現実の諸問題で自分で処理する力が具わってきて、母親から自立しようとする心が芽生えてきた子どもが、現実の危機的事態に直面した際、自立心と依存心との間で揺れているその心理状態を表わしていると言えるだろう。このような、自己が境界線上を彷徨う「泣きべそ」という行為は、少なくとも、広い意味での自己意識が芽生えないうちは、現われ得ないだろう。

以上、「泣きべそ」を自己の発達と関連づけて考えてみた。そもそも発達は個人差の大きいものであり、「泣きべそ」という行為もそれをよくする子もいれば、ほとんどすることなく幼児期を過ぎていく子もいるだろう。「泣きべそ」をかかないからと言って、その子の発達に問題があるというわけではない。私が言いたいことは、もしも子どもが「泣きべそ」をかくことがあるなら、そ

れは発達のには、以上のように意味づけられるのではないかとということである。

(東大・教育学研究科)

〔注〕

- (一) 例えば、自閉症児は、他者が不用意に近づくとパニックを起こすが、それは、彼の自己が未成立で、自己と他者との境界が極めて弱いことによると考えられる。山中康裕「早期幼児自閉症の分裂病論およびその治療への試み」笠原嘉 編『分裂病の精神病理5』東大出版会 一九七六、一四七—一九二頁 を参照。
- (二) 『子どもの発達と教育4』岩波書店 一九七九、一九七—一九九頁 野村庄吾 担当。
- (三) 黒丸正四郎「小児神経症の心的機制」『異常心理学講座4』みすず書房、一九六七、三九頁 参照。

〔参考文献〕

。『異常心理学講座4』みすず書房 一九六七。

。笠原嘉 編『分裂病の精神病理5』東大出版会 一九七六。

。『異常心理学講座8』みすず書房 一九六八。

。『子どもの発達と教育4』岩波書店 一九七九。

。柏木恵子『子どもの「自己」の発達』東大出版会 一九八三。

九八三。

。小林登『赤ちゃんの誕生』岩波書店 一九八四。

。M・ハイデッガー『存在と時間』勁草書房 一九六〇

(上) 一九六六(下)

。木村敏『自己、あいだ、時間』弘文堂 一九八一。

。ワロン『身体、自我、社会』ミネルヴァ書房 一九八

三。

新年 明けましておめでとう、ごさいます。昭和六十一年の幕開けです。

正月は、今や数少ない日本の行事になつていきます。生活の中にコンピュータなど先進機器が浸透し、西洋的な生活をしている私達も、なぜか正月には、日本的ムードに押されがちです。

しかし、現代は、ひと昔前に比らべ、儀式が減り一年の節目、節目が不明瞭になつていきます。正月も、その例外ではないような気がします。若い世代は、正月休暇を伝統的な行事に費すのではなく、スキーに、また海外にとレジャー期間として利用する傾向が強く見られます。伝統的な正月料理も、ハンバーガーに口が馴れた若者には、おいしいとは感じられず、西洋おせちなるものが流行していません。

伝統的な楽しみ方とは異なる、よりカジュアルな楽しみへと変わっていくのです。しかし、一方伝統的なものを再び生

活の中に取り組んでゆこうとする傾向があることも見逃せない事実です。それは、正月という行事が薄れてゆく一方で、より日常的なものに現われていきます。が、残念なことに、それは日本人自身が見出ししたものではなく、西洋社会が、日本文化に強い興味を向けていることから来ています。

ジャパネスク、日本趣味が、外国人家庭の中に多く見られ、その美しさを改めて日本人自身が再確認し始めました。それはひとつの流行として若い世代の中に広まりつつあります。

これからは、正月という行事も、ひとつのイベントとして捉えられ、従来のような正月は、消えゆくのではないかと思われまます。しかし、日本のもつ伝統文化の質の高さが認められている以上、若者は、その時代の流れに沿った方法で、それを受け継いでゆくものと思うのです。

(普)

幼児の教育 第八十五巻 第一号

一月号 ◎

定価三五〇円

昭和六十年十二月二十五日 印刷

昭和六十一年一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 編行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

幼児の音楽遊び 〈全4巻〉

小林美実編 B5判 各120~160頁 セット定価5,700円

〈全国学校図書館協議会選定図書〉

▣遊び方

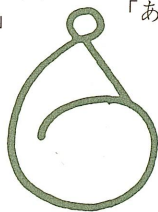
「ろくちゃんが」



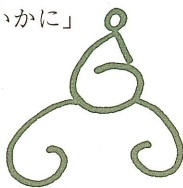
「いちえんもらって」



「あめかって」



「ろくがつむいかに」



「ばつふたつ」



「あつというまに
ピエロさん」

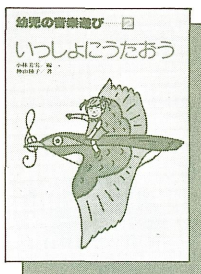


幼児が音楽を楽しむことを第一とする一方、それぞれに「遊び方」「発展例」を加え保育の状況にあわせ選曲できるよう構成しました。音楽を媒体として、生き生きした保育を展開したいとお考えの保育者のために、音楽的に充実した素材を豊富に収録しました。



① いっしょにあそぼう

小林美実編・丹野裕子・中山鈴津子共著
B5判 120頁 定価1,200円 千250円



② いっしょにうたおう

小林美実編 神山種子著
B5判 136頁 定価1,500円 千250円



③ おどってみよう、
ただいてみよう

小林美実編・著
B5判 160頁 定価1,700円 千250円



④ 幼児の生活と
行事の歌

小林美実編・著
B5判 136頁 定価1,300円 千250円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

トッパンの新童謡絵本

思わずくちくちさんでしまう
ファンタジーの世界からやってきた新童謡絵本。



いまよみがえる

トッパンの新童謡絵本

3冊セット

定価2,550円



歌に生命を与えているのは貴女です！人にそれぞれの人生があるように、歌にもそれぞれの歩み道があります。貴女の小さいころを思い出してください。なつかしい、時には勇気づけられた童謡のかずかずが貴女の心の中に

はあることでしょう。いま、フレーベル館では、これらの童謡を新しい企画で皆さまにお贈りします。歌は、なつかしい思い出だけとどめないでください。歌は、貴女が歌いつづけてこそよみがえるのです。

1. ちいさいあきみつけた

うみ	どこかではるが
ちようちよう	ひらいたひらいた
おんまはみんな	ロンドンばしがおちる
めだかのがっこう	あめふりくまのこ
ちいさいあきみつけた	ゆうやけこやけ
おおきなだいこ	

2. サッチャン

おもちゃのマーチ	もりのくまさん
てをつなごう	せんせいとおともだち
おおきなくりのきのしたで	むしのこえ
チューリップ	あかとんぼ
サッチャン	ジングルベル
みなみのしまのハメハメだいおう	

3. てのひらをたいように

しずかなこはん	シャボンだま
ドレミのうた	おなかのへるうた
アイアイ	はるのおがわ
ふしぎなポケット	てのひらをたいように
とおりやんせ	おばけなんてないさ
かえるのがつしよう	

すいせんの言葉



女優
中村メイコ

「かわいい！！」——この本を見たときの第一印象ですそして「なつかしい！！」——口ずさんだとき、思わず心がジーンとしました。母が私に歌ってくれた歌。私が娘や息子たちに歌った童謡。いい歌がいっぱいです。人と人とのふれあいの場が、この絵本にはたくさんあります。みなさんにぜひおすすめしたい絵本です。

すいせんの言葉



歌手
小鳩くるみ

うれしいとき、悲しいとき。子どもたちや、お母さんたちと一緒に歌うとき、いつでもどこでも歌は私の友だちです。長い間みんなに親しまれてきた童謡には、人の優しい心が、みやくみやくと流れています。いまの時代にもびつたりあったこの新童謡絵本。いま私は、素晴らしい絵本との出会いがとても幸せな気持ちになっています。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館